

浜口誠至著

『在京大名細川京兆家の 政治史的研究』

戦国期研究は活況を呈する分野のひとつであるが、中央権力を真つ向から扱った研究書は存外に少ない。当該分野の研究史上では、当時の中央権力である室町幕府の主導者は足利將軍家と細川京兆家とされ、それぞれが個別に論じられてきたのだが、著者の博士論文を原形とする本書はその両者を対象とする点で貴重な成果と言えよう。以下、構成に沿って内容を紹介したい。

まず、序章では、戦国期の足利將軍家や、細川京兆家などの幕政に關与した大名に対する研究史を整理した上で、「幕府儀礼」「京兆家奉行奉書」「在京大名」「幕府政策」といった本書での重要な論点を研究史上の問題点に引き付けて導き出す。

第一章「戦国期の幕府儀礼と細川京兆家」では、戦国期の代表的な幕府儀礼として猿樂興行と大名邸御成、將軍家元服儀礼を検討する。そして、これらの幕府儀礼が身分序列の形成や権力の所在を誇示する機

能を有したと評価し、「在京大名」の力関係を示す指標と捉える。

第二章「細川京兆家奉行奉書による幕政の補完と代行」では、対象文書を網羅的に収集した上で、その発給契機や機能などを詳細に分析し、細川家奉行奉書は幕府政治を補完する役割を有しており、既存の幕府組織とは別個に存在した京兆家独自の政治機構により発給されたとしてその独自性を評価する。

第三章「義種後期・義晴前期の幕府政治と細川高国」では、幕府政治の運営形態に着目し、義種在任期における政策決定の実態と、続く義晴期における將軍御所移転の遂行過程を検討する。その結果、前者では、義種の將軍職復帰を契機として幕政運営の主導権が將軍から「在京大名」に移ったことを、後者では、細川高国ただひとりがこの時期の幕府政治を主導したことを解き明かす。

最後に終章では、以上の議論を踏まえて、細川京兆家当主として「高国家権力」の性格規定を行うとともに、本書の骨格とも言える「在京大名」の概念を提示する。

このように、本書の特徴は、幕府制度上

に明確な位置づけはないものの恒常的に在京し戦国期の幕府政治に参与していた大名を「在京大名」と概念化し、その活動実態を明らかにすることで幕府政治史上に位置付けた点にある。従来、將軍権力と大名とで個別に論じられてきた戦国期幕府を構造的に把握することに本書の主眼が置かれており、著者の意気込みが強く感じられる。

なお、本書の構成上の特徴として、著者は、初出時の原題や体裁に拘らずに本書全体の論旨に沿って既発表論文を再編する労を惜しまないが、欲を言うならば、新稿・既発表稿の区別や初出一覧を付記していただけとありがたかった。

近年、戦国期幕府政治史研究は日進月歩の進展を見せるが、將軍権力や幕府周辺の大名を個別に扱ってしまうことで論点が分散化するという問題をはらむ。これに対し本書は、「在京大名」をキーワードとして幕府政治に参加する大名を描き出し、彼らと將軍との相互関係を明らかにしながら戦国期の室町幕府像を巨視的に把握する視角を提示することに成功している。本書は今後の研究史上に欠くことのできない一冊となるだろう。

思文閣出版 税別六五〇〇円

(佐藤稜介 京都大学大学院

人間・環境学研究科博士後期課程)

上杉和史著

『地図から読む江戸時代』

江戸時代に限るとはいえ、日本図の流れを新書で読めるのは、おそらく、織田武雄先生が講談社現代新書で『地図の歴史 日本篇』(一九七一年)を出して以来のことであろう。

ただ、本書は単なる日本図の流れではない。「江戸時代に作られた日本図やその複製に携わった人々に焦点を当て、時期ごとにどのような日本図が流布していたのか、そしてそこからどのような日本像が読み取れるのか」(二一七頁)を主眼に置き、伝統からの脱却、一七世紀前半の日本像、江戸時代中期の日本図、地図を直す、新たな日本像の展開、の五章でそれが展開される。従来、江戸時代の日本図を語るには、幕

府撰日本図と伊能図、前代の地図作製者である行基(行基が日本図を製作したかどうかの議論はさておき)、江戸時代中期における石川流宣、そして後期の長久保赤水を軸にして論じられることが多かった。それに加えて上杉氏は、自身の研究成果(『江戸知識人と地図』京都大学学術出版会、二〇一〇年)に基づき、森幸安と小津栄貞(本居宣長)を加えて論じる(第四章)ほか、地図を介した当時の知識人のネットワークについてもふれる。確かに、森と本居からは、日本図製作に対する思想的な背景を看取することは可能である。しかし、彼らの製作した日本図は手描き図であり、巷間に出回ることにはなかった。その意味では、「流布」とは言い難く、世間一般が認識していた日本図(像)ではない。ただ、日本図製作に携わった人物を広く紹介することは、意義を認めてよいだろう。

また、地図製作といえ、カルトグラフィアにとどまらず、板元について論じるのは不可欠である。この点について、流宣日本図(『本朝図鑑綱目』)の板元相模屋太兵衛、赤水日本図(『改正日本輿地路程全図』)の板元浅野(藤屋)弥兵衛を取り上げ、日本図に限らず、世界図を視野に入れて、販売戦略を論じている。この論によって、当時の日本図も含めた地図の流れが、より理解を図れるのである。浅野と赤水の繋がりについては、以前から指摘されるどころである。しかし、浅野は赤水日本図の他に、『大日本国指掌図』や異なる日本図の板木株を取得している(『文化九年板木総目録』)。このことを言及する必要はなかったであろうか。

些か論旨が飛躍しているように思える点も散見されるが、紙数の都合上、日本図に関わって、気になった点を数カ所あげておくことにしたい。

一つは、「流宣日本図が刊行された後、北以外を上とした構図を持つ日本図は現れなくなった。(略)流宣日本図のイメージが社会に定着した結果、日本図の北は上という暗黙の理解が広まったのである。これは、意外に注目されていない事実であるが、日本像の展開としてきわめて重要な変化」(一三〇頁)とするが、それはどうであろう。例えば、本書所収の林子平の『三國通覽輿地路程全図』は刊記からすれば東が上であり、翠堂彰の『日本輿地全図』(嘉永